



Title	科学技術と人間 : ニー世紀のライフスタイルー考
Author(s)	千葉, 恵
Citation	北海道大學文學部紀要, 45(1), 1-17
Issue Date	1996-08-09
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33671
Type	bulletin (article)
File Information	45(1)_PR1-17.pdf



[Instructions for use](#)

科学技術と人間

——二一世紀のライフスタイル一考——

序 未来圏から吹く透明な風

一九六〇年代、私の少年のころ未来の象徴といえは鉄腕アトムであった。そこには、正義の味方が不思議な科学の力で縦横無尽に活躍する、そんな科学文明に対する無邪気な憧れと夢が日本の再建の槌音とともに心地よくひろがっていた。子供達に二一世紀を描かせれば、そこにはガラスばりの超高層ビルの青い尖塔が健康的に輝く太陽を写し、流線の浮動型の列車が建物の間を音もなくすり抜け、人は噴射機を脊に自在に空を飛び、事故も病気もなく、楽しいな家庭団欒が描かれていた。科学技術文明は人間にその無限の進歩とともに平和と幸福を約束しているように見え、その陰りを知らないユートピアに夢ふくらんでいた。七〇年代に入って、ローマクラブの報告に見られるように、地

千 葉 恵

く、全人間的に人間というこの不可思議な存在者への理解を深め、不可逆的なこの文明を基礎にして築かれる二一世紀の生活様式のとるべき姿を見定めたい。半世紀以上前に宮沢賢治が青年達に新たな時代のコペルニクスやマルクスと呼びかけたさいに感じていた、「この颯爽と諸君の未来圏から吹いてくる透明な清潔な風」を「決せられた南風」を新たに感じたいものである。

第一節 現代文明の基礎にあるもの

一・一 人間と自然の差異の自覚

この節では、科学技術の驚嘆すべき発展により形成された現代機械文明の諸特徴と、そのもとにある科学と技術の特性を分析考察する。先ず、人間と自然との関係の基本枠が産業革命以降ことに二〇世紀において、それ以前とは決定的な変質をきたしたことが指摘されねばならない。かつて人は自然への畏怖のなかで大地に根ざし、自然とはその恩恵に浴しその摂理に服従するものという自覚のもとに密着し溶けこんでいたが、技術の発展に応じて人は舞い上がり自然と対峙して自らの技術で自然を加工することによって自然に関わることを当然のことと考えるようになった。ナノスペースから宇宙の誕生にいたるまでの時空が人の手の届く所となった。それとともに人は自然と多様な界面のもとに接し、かつてのように両者の関係は一樣ではなく複雑なものとなった。換言すれば、自然が科学技術によって解明、利用されればされるほど、それを媒介に様々な面において自然と接する人間は自然との差異の自覚を強め、距

離ができたのである。自然は自然ではなく、科学技術の対象が自然となったのである。このパラダイムの転換は多くの新しい特徴を人間につけ加え、ポストモダンと呼ばれる大衆消費社会、情報化社会が出現した。技術の発展とともに私達の生活様式も変質したのである。自然のエネルギーを技術的に利用することによって、私達は自分の身体的エネルギーをセーブしているそれが現代である。文明国にあつては谷までおりて水を汲みに行くことも、薪を拾いに林に入ることも野原に猟にでることをせずにも、いわばスイッチひとつで渴きと飢えと寒暑を凌ぐことが出来る。生活の基礎的なものばかりではない。芸術活動や知的探究など心の喜びにも道具としての技術は大きな変化をもたらした。二一世紀もこの方向線上に築かれ、各家庭に配備されたロボットが身の回りの世話からゲーム遊びや哲学的会話の相手までしてくれるであろう。人は電子回路に友情を感じるであろう。

一・二 大衆消費社会と情報化社会

次に、現代の生活様式そのものといつても過言でない大衆消費社会と情報化社会の特質を見ておこう。技術は資本主義社会における自由競争の名のもとに効率のよい自動化による廉価な大量生産を可能にし、大衆消費社会を形成した。富への自由な追求が保証され、国家機構はせいぜい金利の調整などによる干渉にとどまる。自由経済のメカニズムそのものも人間の競争本能に基づいた近代のひとつの経済技術の所産である。競争は生産者には効率と品質を追求させ、販売者にはサービスの商品価値をそして消費者には快適さを追求させる。技術はこの競争社会を支え維持する動脈として不可欠な流通と交通の高速化を実現した。今日、五三夢ならざる午後のうたた寝の間に富士も大井の川も夢の像と消えていく。貨幣という見事なカラクリがこの消費文化の背後に潜んでいる。私達は労働報酬として賃金を

得るがゆえに、それに見合う消費を当然の権利とみなす。しかし実は現代においては、これまでの自然の富の蓄積故に労賃に見合うどころかはるかに豊かな消費生活が営まれている。というのも自然は貨幣では計り得ない生命そのものと、それを維持する恩恵を惜しみなく与えてきたからである。人工的な貨幣が自然の恩恵の享受と技術革新を正当化し促進する。ここに貨幣のマジックがある。二一世紀には技術と貨幣の相乗効果のなか、より廉価で高品質のモノが豊かに溢れ、様々なサービスをより迅速に買うことができるであろう。

現代は情報社会でもある。科学技術は一九世紀初頭の電磁波の発見に基づきその応用としてマルコーニがラジオを発明して以来、通信システムと情報処理システムは絶えざる発展を続けこの情報化社会を構築した。現代は情報を発明したと言われるほどに、その量と集積速度の変化は情報の概念を変質させた。地球は光の早さで輝き飛び回る情報に蚕のようにぐるぐる捲かれ小さくなっていく。人工衛星により地上の三〇センチの物体まで識別できる現在、地球の片隅で隠れて行われていることのうちで白日のもとに晒されないものはないと思えるほどである。近年のベルリンの壁の崩壊に象徴される東欧の自由化のスムーズな実現は、情報伝達の微細さと徹底さそして迅速さによるところが多い。多様な情報処理システムの下に、気象や魚の回遊コースから三〇年後の給料に至るまで予測され把握されている。情報は、地球を狭くすると同時にガラス張りにして、人の行動を支配する。かくして情報とは支配の別名となりつつある。「知は力なり」とベイコンは言ったが、情報力が競争基準となり、平家ならぬ「電算家にあらずば人にあらず」という感なきにしもという時代である。

一・三 科学技術の特質

以上、簡単に人間と自然の關係の多界面化という基本枠のもとに大衆消費化と情報化という視点から現代社会を捉えてみた。次に、この社会の基礎にある科学や技術の特徴（一・三）と自然物と人工物の区別（一・四）を分析し、未来のとるべき形を作りあげる材質を吟味したい。

なぜ科学や技術がかくも驚くべき力を発揮し進歩するかと言えば、かけがえない一回限りの「私」を括弧にいれ、三人称の世界がその土俵だからである。「私」のこの感動や痛みも医者やアドレナリンか何かの分泌物の増減として数量的にとらえるであろう。それ故に薬の投与やある人の臓器を私の臓器ととりかえることができるのである。誰でも立てられたひとつの仮説を顕微鏡や望遠鏡を通じて検証することが出来、誰でもマニュアルに従い洗濯機を動かすことができるのは、科学技術が三人称の客観性と普遍性を備えているからである。「私」の感情や個性が数字やデータ、マニュアルに決して干渉することがない。それ故に誰もがそれに手を加えることの出来る共通の財産として享受し次代に継承出来る。これはもちろん科学者が心ない存在者だというのではない。アインシュタインは「物の中心的な秩序に対する感覚」（W.パウリ）を持つていたのであり、彼の個性が相対論を生み出したのであるが、その理論は三人称のものであり誰が計算しても同じ値がでるのである。ともあれ科学技術を生み出す明晰な理性とは感情の揺らぎや不定性から切斷され、〇と一からなるデジタルな思考によつてどんなに微妙な違いでも、掴んでしまえばはつきりした違いとして捉える細かい幾何学的な網の目を持つ脳の所産である。たとえファジーなものを扱うにしても、電気的に処理するかぎり自然のもつ秩序や規則性というデジタル要素によつて明確にぼんやりと掴むのである。ピュタゴ

ラスやプラトンにとってロゴス（ものの理）とは比例という意味を持ち、幾何学的な対称性こそが根源物質を形成していると考えられた。数学は感情や身体的なところからもっとも遠いところでなされる抽象的思考である。観察された自然を数学をモデルにして像を描くこと、それが自然科学の基本的特質だと言つてよい。それはあたかも切断された大脳がヴァットのなかで生息してもなしうる感官の座なる曖昧な身体を持たない活動と比べられよう。

技術は科学の行つた自然の描像と分析をもとに、人のある利益のために人の描くあるゴールをつまみ価値を実現するために科学を応用する営みである。技術は人間の意図の投射である。ルネッサンス期においては水車、機械、ポンプ、圧搾機などがそして現代においては人工衛星などの機械が生活の現実として人々の幸福のために考案された。幸福とは言わないまでも少なくとも技術の本質に内在する善とは効率、利便性であり、安易さとしての快適さである。

技術に私達の生が依存する程度において、必然的に効率、利便性そして快適さが生の判断基準となる。技術文明の自己論理として一度設定された方向での進展が組み込まれているからである。例えば、白黒テレビはリモコンカラーへそしてハイビジョンへと技術革新がなされ効率化、利便化そして快適化を促進させる。

重要なことは、技術は自ら目的を設定することがないということである。雪だるま式に膨らみ加速したとしても、その方向を定めるのは技術ではない。技術は設定された目的のよさを問うことなしに前提にした上で、それをうまく実現する最善の手段に関わる。例えば車社会の善し悪しを括弧にいれて、車そのものの快適性、安全性そして効率性を追求することが技術者の仕事である。従つて新しい価値が創造されれば、それを実現する技術の方向も従来とは異なるものとなる。

一・四 自然物と人工物の境界

科学と技術の特徴は以上のようなものだとして、ここで自然の作り出すものと技術の作り出すものの違いを見ておこう。アリストテレスは自然物を「自らのうちに運動と静止の原理をもつもの」と規定した³。その際運動とは変化一般であつて生成消滅、量質変化そして場所移動を含んでいる。自然物はその本性に即して変化する。動物がその範例とならう。場所移動しない石といえども自ら持つ本質的組成故に地質学的次元の時間において生成消滅するであらう。他方、人工物は人間の意図の反映であるが故に、目的がその本性となる。ベッドの本質は眠るためのものとして規定される。たとえそれが朽ち果てるにしてもベッドがたまたま木材でできていたからであり、その本質である眠るためのものであるが故にではない。自動車は自ら意図して動く自動ではないが故に自然物とは見なされない⁴。

マルクスはアリストテレスに基づきながらも自然物と人工物のあいだに連続性を見る。マルクスは生産物をさらなる生産のための労働の条件と見なし、そこに組み込まれる時には「生産物は再び生命を賦与される」と主張した⁵。組織であれ生産現場であれ人なり物がひとつの機構のなかに置かれる時、全体が生物体のように有機的に作動する機構の論理が内在していると考えることによって、人間の疎外の危険性を警告したのだと思われる。確かに人工物は人間の意図の反映とは言え、自然物の本性的諸特徴を加工する以上、目的を実現するその内的構造は自然法則にかなうものでなければならぬ。人工物が自然の支配下から逃がれることが出来ないということは事実でありその点で連続的である。しかしたとえ人工物が自然物のように有機的に機能し類比的な側面をもつにしても、生産物そのものが「再

び生命を賦与される」というのは比喩的な表現にとどまり、組織や生産ラインの目的の設定はやはり人がなすのであって、生産物そのものの中にはない。決断は何であれ技術のものではなく人間のものである。決断によつて核弾頭を廃棄することはできるのであり、いわば変化の原理を外に持つ生産物の生殺与奪の権は、目的志向的な技術の本質からして人間のものである。道具は人間の道具である以上、本質的に人間の利益に仕える従僕なのである。

しかし、その技術が今や主人であるべき人間の生活様式をも変えてしまったことは事実である。技術の論理が人間の支配的な論理となつて主人と僕の立場が逆転してしまった感を否めないのが世紀末の現実である。スピードは不思議な魅力をはなつ女王蜂のようだ。人は彼女のために時間を貢ぎ続けて何ら惜しまない。パソコンのキーボードを叩いていると脳の思考がローマナイズされるといふ冗談があるが、それは二つの処理システムの界面の移動侵食と言えらる。技術は外なる自然のみならず内なる自然としての人間をも侵食している。そしてこのまま二一世紀に突入するであらう。

第二節 古い人間像からの解放と新しい人間像の創造へ

二・一 症候群

この節においては、第一節の科学技術とその文明の特質の分析にもとづいて、現代文明が捨象し見過ごしてきたものが何であつたかを考察し、新しい人間像と生活様式にむけて人間の取るべき姿を暗示したい。技術と消費の対象、

それが自然であり世界であるという以上の分析が正しければ、この文明が作り出す二一世紀の人間は次の様々な症候群に捕らわれ発熱するでもあろう。人は自ら自己の生のゴールを問うことなしに出来あいの価値や制度に外側からうまく適合させることに力を注ぎ、内側から溢れ出る実感や思索を抑圧軽視し、生の内側からの動機づけが希薄化する傾向を帯びるのであろう。これは内側からの創造的な生ではなく外側から操作的な生を営むことでありマニュアル(Manual)症候群と呼びたい。さらにマニュアル操作を通じて人はどれだけ自分のために自然であれ他の人からであれ、効率よく利便と快適さを、総じて利益を引出しうるかが、思考や生活判断の基準となるであろう。これを全てをガツガツ卑しく手段化するガイチツヒ・ミーンズ (geizig means) またはミーン・ミーンズ (mean means) 症候群と呼びたい。その他にも、多量多様の情報のなか、人は一方では花から花へ飛び交う蝶のように舞い、動機づけなしに集積される情報や疑似体験は有機的な秩序や方向のない虚構感、ゲーム感と非現実感の温床となるでもあろう。これを何でも食べるが消化不良で血肉化しないオムニヴァラス・デイスペプシア (omnivorous dyspepsia) 症候群と呼びたい。この症状は情報システムが人間に侵食する度合いに応じて進行し、自己の世界と他者へのつながりを可能にする媒体としての記号が実在感を増し、心身を持ち生成消滅する人間のいわゆる退つ引きならない現実感が消失していくであろう。このさらに進んだ症状を仮想がそのまま現実となるヴァーチャル・リアリティ (virtual reality) 症候群と呼びたい。他方、多量多様な情報のなか共感を寄せられるグループが細分化極小化し、各小集団内で溢れる情報に追われ小さな関心に留まり、異質なものに対し閉鎖的拒絶的になるであろう。これと同じテーブルにつきながら各々別の料理を食べるスモー・ガス・ボード (snor-gas-board) 症候群と呼びたい。この症状が進むとき、例えばそれ自身として強い引力を持つ快や官能が一人歩きし、基本的には相互に一切を受容し他に償うことのできない生命を作る、そのような

な性の持つ精神性は排除され、生全体の価値のなかでそれらを相対化する力が消失していくであろう。この閉息的な世界で自己中心的にひとつの価値が突出する症状をティメティック・エゴセントリズム (timetic egocentrism) 症候群と名付けた。二一世紀にはその他様々な症候群が蔓延して地球と人類が満身創痍となることが危惧される。今日人は人格を失いモノと化す危機に晒されている。すべてが手段と化し、すり減っていく。私達は自然をも人も消費する。男は女を女は男をそして私は私自身を消費する。二一世紀の辞書には与え、捧げ、共感し愛するなど肯定的な創造の源泉となる語は見いだし得ないかもしれない。技術や貨幣がそのものとして悪だというのではない。先に見たように技術はその本質上人間を支配することはないのである。人間の決断が人間と技術を支配する。人が自ら造りだした技術と貨幣の論理に飲み込まれてしまう時、人間であることの豊かさを自ら捨てるのである。いつの日か最も緊要な空気や水がダイアモンド以上の値打となる時、人は貨幣の尊大化の虚構に気づくであろう。人の崇拜する貨幣と言えども自然と人間と引き換えにするには少し安いのである。手段の機能に集中する技術の論理が生論理となる時、生きることのすべてが何かの手段となるであろう。小学校は中学校のためそして高校へとそんなに急いでどこへ行くのだろう。手段は今ここで果实を手にいれうるならお役御免となる、出来れば無くて済ませたいものである。今愛を奪えるなら、ミツグ君などしないであろう。競争意識によつて設定された目的も手段でしかない。競争は価値の共約性を前提にする。しかし地位や金であれ、価値を置かれるものはそれが他者との競争基準として機能している時は競争者の手段でしかなく、真に追求されている善きものではなく、それを利用する競争者のありふれた古い欲望充足が隠れた価値だったのである。つまりそこでは、自己を捧げるに足る自己を変革するほどの新しい価値には出会っていないのである。人は自己の生全体を何の手段とするのであろう。歌を忘れたカナリヤのように、生を

忘れた人間の倒錯の世紀がやってくるのであろうか。

二・二 喜ばしき創造

二一世紀において、人間は自ら持つ自然の治癒力と知恵によって、この危機を乗り越えうることを信じた。技術文明はこの一回限りの歴史において不可逆的なものである。もはや原始生活に戻れない以上、緩やかな進展のなか、自然の最小限の変更搾取によって自然の力を最大限に引き出す省エネ政策は不可欠となる。技術は物を短小軽薄にしこれまで以上の機能を果たさせ、太陽や潮汐等の力を一層効率的に実用化するであろう。心頭滅却すれば火もまた涼し的な精神主義は、人間であることの基本的な身体性を軽蔑するが故に元来身体的である喜びを欠き、長期的に安定した力とはなりえない。衣食足りて礼節を知るとするのがここでは現実的である。この文明の必然的帰結として矢継ぎ早に起こる課題には、新たな技術の創造によって対処するしかない。しかしより根本的には自然を消費することから、自然にその本来の力を回復させることに、緑ときれいな空と水を与えかえすことに喜びを見いださう者となるか否かがこの危機を乗り越える鍵となる。

さらには、無限の可能性を秘めたままないがしろにされてきた内なる自然としての私達自身を創造することに関心が向けられるか否かが鍵となる。私達が何をしていても、すきま風のように忍び寄り寄る問いがある。背後からどこからともなく「そうするお前は何者なのだ」「本当にそれで善いのか」とささやく声がする。この問いに対して私達は実存的参与としての自己理解、世界理解を提示することが常に求められている。「私とは何者か」「何が真に善いものなのか」という問いは技術では解けず、人は生の方向を各自が決断することによってそのつど解を与える。この実存的参

与の対称的な範例としては、ドンファンと聖フランシス、ヒットラーとガンジー等が考えられる。この自己理解が技術の関わる「私のもものども」例えば能力、財産、健康等の方向を決定する。それ故、人が自ら持つ技術で社会に参与し社会を真に豊かなものにしていく際に、この根源的問いを自ら問うことは不可欠である。目に見えない「私」の理解が目に見える「私のもものども」に生命と方向を与え、今度は逆に方向づけられた「私のもものども」が新しい外的世界との出会い、刺激により「私」の理解に影響を与える。人は「私」と「私のもものども」の間のフィードバックにより試行錯誤のうちに自己のうちに善きものを、新しい「私」を創造、確立していく。

モノやカネが内的空虚を埋める代用品と化し「私のもものども」が「私」と見紛われている世紀末、今やその虚構性と非人間性は暴かれ、私達の眼差しは内なる自然の価値に向かうであろう。今や古い価値を凌駕する新しい自己理解の、新しい価値の創造の息吹が聞こえる。喜びがあるところ、そこでは容易に古いものから新しいものへの転換が起こる。喜びは様々な苦難に耐える力を与える。造化の極みと言えるこの驚くべき人間。この絶妙の臓器をそなえた体。百億をこえる細胞からなる頭脳。愛故に生命を捧げるこの無私なる心。人は、生涯共にする自己自身の人格の創造に何よりも喜びを見いだすであろう。二一世紀は外なる自然の消費を抜けて、内なる自然としての自己を創造する芸術の時代となろう。芸術は目的志向の技術とは異なり、やみがない内的衝動の発露としての生命の力である。人はその時、体験にできあいの借り物の言葉をあてがい三人称的に処理することなく、自分の実感を信じ前言語的な印象と感動を沈澱させ、体の内側から言葉が、行動が熟成するのを各自のペースで待つであろう。その時自分の実感と理性をも偽らない、確かなものが生まれてくるであろう。恋の感動は人を詩人となしそこに歌が生まれる。機械はこれまでのヒット曲の語彙を操作し、それよりもヒットする歌詞を並べるでもであろう。しかしたとえ稚拙であっても身も心も

ふさわしい美しい者となりたい者の生命宿る喜びの詩の前では、操作で勝ち得た歌謡大賞の詩も心なしか空しく響くことであろう。それは手段に過ぎずそこになかったからである。総じて、体験に根付かない抽象的思弁は自己を安全地帯において為されるか、自己と他者に対する教条主義的なアイロニーとしてしか機能しないが故に、真の変革と創造を促す体からみなぎる力にはなりえない。そこには操作はあつても喜びはないのである。

二・三 身体化としての愛

人は操作を離れ創造としてそのつど新しく世界に関わる時のみ、他をも自己をも手段とすることなく今を生きている。目的そのものとして人が人と交わる時、人と人はある代替不能な唯一的な関係をそのつど創造している。教えることによつて学ぶのであり、与えることによつて得るのである。何を得るのか？ 自己の生を、内的な豊かさを得るのである。与えうる新しい自己と出会うのである。生は動的なバランスである以上、偏りある古い自己に停滞すれば形は崩れていく。希望が現在を造るようにはなく、まだ無い未来に現在を手段化する時、心そこになく生は空虚な形しかとりえない。生が凝縮した形を取るの**は愛として自己を対象に目的そのものとして捧げ働きかけている時のみである。**なぜならそこには新しいものとの出会いがあるからであり、「愛から離れる時、すべてから離れる」(パスカル)⁽⁶⁾からである。矮小な自己を対象に映すナルシズムに生きる時、対象は古い偏りある自己を増幅させるだけの手段となり、何ひとつ新しいもの、自己を変革するものには出会わない。世界がもしすべて自分の思いのままに操作できるとすれば、それは単調なものとなり、全てを得ながら何一つ得ないというパラドックスが生じる。創造とは常に新しいものとの出会いであり、そこには焦燥と狂奔は消え失せ、満ち足りた豊かさが残る。

創造する力の源は単なる情報ではない、理解である。よく思索され秩序づけられ血肉化した情報ほど人に堅固な信念を与えるものはないように、情報の蓄積が理解に到達するにはそれを身体化する+αが必要とされる。それは愛であり共感である。「理解」とはギリシャ語で「共に行く」と書くが、虚心坦懐に対象の下に立ち、共に歩み、じつと聞き入り観察する時、新しく伝わって来るものがあるであろう。それは情報のようにあたりはずれとしての真偽ではなく、身体化の度合に応じる浅深を伴う理解である。理解は常に対象へのある程度の同化と同意を伴う。たとえ意見を異にしても、人を理解した場合には、「もし私があなただったら、同じことを為した言ったでもであろう」と反現実仮想の同意が心から与えられる。理解とは再創造の視座である。そしてこの理解する態度から、何か異質なもののまた世界の身体化が始まり、自己と他者と社会を、肯定のうちに変革し創造する新鮮な力が世界から与えられる。北風ではなく、暖かい肯い^{うべな}の風ともなう太陽が旅人のマントを脱がすのである。世界を愛する者のみが世界を理解し、世界に生命を与え、また世界から自己の生を得る。愛とは古いものを壊しつまり過去のことを過去のこととしておしやり、新しいものを造らずにはおかない積極的可能性なのである。

結論 創造的人間の世紀

賢治の感じていた未来圏から颯爽と吹いて来る透明な風とは愛であったに違いない。二一世紀の創造的な人間はその生命の息吹に触れながら自己と世界のヴィジョンを描くであろう。彼や彼女は愛のもとに自分の理性と実感を信じ、正面から人と事柄に接し、矮小な自己を対象に投射することなく、異質なものははじくことなく、対象をそのものと

して捉える明析で高質な理性を、感動と創造の源泉となるみずみずしい感性を、永遠なるもの聖なるものにたいする深い靈性を自己のうちに涵養するであろう。アリストテレスやアインシュタインのように明析な理性を持ち、モーツアルトやシャガールのようにみずみずしい感性を持ち、親鸞やルターのように深い靈性を持つであろう。ヒマラヤのように氣宇壮大で、スペースシャトルのように緻密で、岩陰に揺れるひとものスミレのように繊細、可憐で、春風のようにおだやかであるであろう。その時人はもはや競争者としてではなく、分かちあう価値を創造実現する同労者として力をあわせて地球を担い、造化の極である人間の人格の完成に向かう。情報と操作の時代から理解と創造の時代へ、スピードと効率と競争の時代からゆとりと実感と協調の時代へと向かう。一人一人が愛のもとによく生きる実存的決断を自覚をもってなす時、与件の制度や価値のなかでうまく生きる操作的な生から解放され、機械文明の自己発展の渦から抜けでるであろう。自己と他者の貴さに気づき、愛のもとに人格を完成させることに無上の喜びを見いだす時、技術は再び正しい位置におかれ外なる自然の搾取は止むであろう。愛と生命が指導する創造的な生活こそ二一世紀にふさわしい生活様式である。そんな二一世紀でありたい。終りに、二一世紀を造るすべての人にデンマーク王子の言葉を捧げよう。「今来るのなら、後では来ない。後で来るのでなければ、今来るはずだ。たとえ今来なくとも、やがてはかならずやってくる。覚悟がすべてなのだ」。

註

- (1) パスカル「パンセ」四三四。
- (2) 宮沢賢治「生徒諸君に寄せる」。

- (3) アリストテレス「自然学」第二卷第一章。
- (4) 自然物と人工物の関係についてのより詳しい論述として、拙稿「アリストテレスの目的論的自然観 I」、「北海道大学文学部紀要」第 四二卷二 一九九四年 一五三頁以下参照。
- (5) マルクス「経済草稿」一八五七〜五八、英訳全集 第二八卷二八五頁。
- (6) 愛についてのより詳しい論述として、拙稿「エロースとアガペー——ヘレニズムとヘブライズムの絆——」、「北海道大学文学部紀要」第 四四卷二 一九九五年 参照。
- (7) パスカル「パンセ」六六八。
- (8) シェイクスピア「ハムレット」五の二。